

◎中学生の部

その他の良い作品

「ふるさとの言葉」

東中学校 二年

新井 夏海

私の住んでいる羽生市

ふるさと独特の言葉がある

おじいちゃんやおばあちゃんが

よく使っている言葉

羽生弁と言われる言葉だ

お年寄りの方と話をすると

ふるさとの言葉がたくさん聞ける

たまにわからない言葉もあるけれど

聞くとなんだかほっこりする。

心があたたまる感じの言葉

それがふるさとの言葉

「キヤッセ羽生」のキヤッセも羽生弁だ

大丈夫をだいじゅと言ったり

少しのことをちつとんべえなど

なんだかかわいい

私が大人になった時

気がつく

ふるさとの言葉をきくと

使っているのだろうな

大きな木

東中学校 一年

池田 和佳奈

その木は 父のように
いつもそこで むねをはっている
その木は 母のように
いつもわたしを 見守ってくれる

近くの神社の 大きな木
太い幹が 今も その体を支えている
きつと今日も 風にゆられながら

小鳥たちと 話している
横にながくながく のびた枝は

神社を通る 私たちに
日かげをつく につけてくれる

小鳥の歌を ききながら
こもれびに 木のやさしさを

感じてみる

いつもみている 大きな木
私たちの 大事な木
今度は私が 守る番

私が思うふるさと

東中学校 二年

大澤 神月

八月十三日おばあちゃん家に行った
こんにちは！
玄関をあけおばあちゃん家の匂いだ
かとりせん香となつかしい古い匂いだ
あれ！かんちゃん大きくなったわ！
あいさつそうそう、仏様を迎える
準備に入り、位はいをどかし
線香立て、仏花、線香さし、おりんを
きれいにした
お寺に仏様を迎えに行き
線香のけむりに乗せ、案内してきた
みたことのない人
「ようこそいらっしやいました！」
と母は言う
茶器でお茶を入れた
母はずっと仏様に話していた
頭を下げたままだ。とても気になる
夕飯をだすそうだ
メニユーは昔から
白飯にみそ汁、かぼちゃのおかず

食後はお茶を出す
このことは先祖から私たちに
伝えられる
私は考えた
この人達が生きていて私達がいる事
感謝の気持ちと
なんとなく不思議な気持ちになった
私達の先祖もここに住んでいた
会ってみたい
いろいろ話を聞いてみたい
仏様は三泊四日でお土産を持たせた
なす、きゅうり、ピーマン、人参
帰りは、なすのうま、きゅうりのうまで
帰った
お寺まで見送りに行った。
「またいらしてください！」
これがおぼんの行事だ
私を感じるふるさとそれは素晴らしい

お母さんの梅干し

東中学校 三年

北林 己座

きつとお母さんから姉へ
引き継がれて行くとき……
僕も機会があれば……
手伝ってみたいかも

お母さんは、この季節になると
梅干しをつける
年々上手になっっている

姉は梅干しが好きだ
僕は梅干しは苦手だ
すっぱいからだ

梅干しになるまで
とても時間がかかる
大きな南高梅
においは桃の熟した実のよう
このままでも食べれそうだった
でも毒があるみたい

完成した梅は
ほどよい塩分でおいしい
でも僕はそのままより
ハチミツ漬けの梅干しのほうが好きだ

雨

東中学校 二年

関口 萌子

雨が
つくれた
宝物
私も
皆の
恵み
にな
れる
雨の
よう
にな
ろう

ネットからアルミサッシに
つたう滴
灰色の空をうつして落ちてゆく

一瞬のきらめき
残して恵みになる

広がる波紋
はね上がる粒
大勢のなかにとけて見えなくなる

粒の中のワタシが目を見つめる
窓についた雨の背景
外に連れだしていく

空があかるくなつて
プリズムが反射して橋をかける
部屋を飛び出して

「綺麗！」

雨が
つくれた
虹

大切な想はずつと心に

西中学校 三年

戸ヶ崎 結優

上がらない雨
ざあざあと心と体に打ちつける
どんな日も毎日通った道をまた
自転車に進む

仲間とともに流した汗。
仲間とはげましあった日々。
仲間と辛いとき、支えあった。
仲間と嬉しいとき、喜びあった。
顧問の先生、コーチは厳しくて泣きたいとき
もあつたけど、最後まで指導してくださって
私は本当に恵まれている。
そんな感謝や思い出は
いくら雨でも流せない
いくらぬれても流れない
切り替えられたはずなのに
ああ
今ほおを冷たくつたうのは

きつと雨じゃない

思い返されるのは

涙だけではない

これから思うのも

涙だけではない

何より大切な他人を想う心 奉仕の心

自分にとっての利益のみで動かない人間像

一番大切な人間の原点。人間の根本。

それを知れた部活動生活は貴重なものだった。

そんな人間になる為に私は手をのばす

どんよりとした雲が覆う未来に虹をかけてみ

せるんだ。

ああ

まだ雨は上がらない

ざあざあと心と体に打ちつける

何年たつても変わらない道を、私はまた自転
車で進むだろう

夏の通学路

東中学校 一年

吉田 壱成

「ミーン ミーン」
「ミーン ミーン」
セミの声を聞きながら
暑い日差しを浴びながら
僕はすっかり使い慣れた自転車の
重いペダルをおもいつきり踏む

「カン カン カン」
毎腳踏み切りで自転車が止まってしま
うでも電車の通り過ぎる風が気持ち
いいそしてまた重いペダルを踏む

同じバトミントンのラケットを肩にかけた
友達が
向こうからやってくる
三人で気持ちのよい風にふかれて
育った町をかけぬける
「パンツ パンツ パンツ」
「パンツ パンツ」
シャツを打つ音が

体育館にひびきわたる
風をきるようなラリー
激しい動きに
気持ちまで熱くなる
体操着も汗ですっかり重くなる
部活が終わり
重くなつた体に
夏の日差しが突き差さる
セミの声を聞きながら
残りの体力をふりしぼって
また重いペダルを踏む
顎から汗が垂れる
田んぼの緑が風にゆれる
太陽はどこまでも高い